

城のレイアウト

松本城は、大天守、乾小天守、渡櫓、辰巳附櫓、月見櫓の 5 つの建物で構成されている。

乾小天守は、大天守と渡櫓でつながっている別棟の天守閣である。この配置を「連立式天守」と呼ぶ。これに対し、辰巳附櫓と月見櫓は大天守に直接取り付けられており、これを「複合式天守」と呼ぶ。松本城は、日本で唯一、これら 2 つの構造が同時に見られる城である。

1929 年に制定された「国宝保存法」に基づき、1936 年に初めて国宝に指定された。その際、松本城は連立複合式天守の珍しい例であることが取り上げられた。

第二次世界大戦後、1929 年に制定された国宝保存法は 1950 年に文化財保護法に改められ、松本城は 1952 年に国宝に再指定された。

松本城の主な特徴

(1) 平城

松本城は、北アルプスに囲まれた標高 590m の平地に築かれた。山城に比べ、平城はより強固な守りを必要とした。松本城はもともと 3 つの堀に囲まれ、土塀や門構えで入念に囲まれており、武士は城内に住み、攻撃に素早く対応することができたのである。

(2) 現存する最古の五層天守閣

松本城は外層 5 階、内層 6 階の天守閣としては最古の例である。大天守、乾小天守、渡櫓の三棟は、石川数正（1593 年没）の時代に着工され、石川康長（1554-1643 年）が完成させたものである。

石川家は豊臣秀吉の家臣であった。松本城は、秀吉の最大のライバルである徳川家康（1543-1616）の本拠地、江戸城（現在の東京都）を囲み、監視するために築かれた五城の一つであったと言われている。

(3) 戦争のための設計、平和のための設計

石川家が松本城を築いたのは 16 世紀後半、長い戦乱の時代であった。この時代、大名と呼ばれる地方の武将たちは、領地を支配するために城のネットワークを構築していた。

そのため、大天守、乾小天守、渡櫓の 3 つの建物には、さまざまな防御設備が施されている。大天守は 115 の挟間を備え、石垣の基礎の上に 11 の「石落とし」と呼ばれる開口部が突き出ている。これらの開

口部からは、弓や火縄銃で敵軍を攻撃することができた。内堀の幅は火縄銃が正確に撃てる最大距離である 60m を超えないようになっており、周囲の防御も火縄銃を意識して設計されている。さらに、大天守の 1 階と 2 階の壁は厚さ約 29 センチで、火縄銃で撃っても貫通することはない。

一方、辰巳附櫓と月見櫓の 2 つの新しい建造物については、また別の話がある。これらは江戸時代（1603-1867）の太平の世、松平直政（1601-1666）の時代に建てられたものである。月見櫓のアーチ型の天井や朱塗りの縁側は、防御的な要素がないことから、戦のための会議ではなく、平和的な会議のために建てられたことがわかる。

(4) 構造的な工夫

松本城は、女鳥羽川と薄川がつくる沖積平野に築かれている。この平野部の軟弱な湿地帯のために城の建設は困難であったが、1000 トンの大天守が徐々に地中に沈んでいくのを防ぐために、建築技術者たちは革新的な工法を駆使した。

内部サポート構造

基礎の内部サポート構造には、16 本のヒノキの丸太を 4×4 のグリッド状に配置した。直径約 39cm、長さ約 5m の丸太を礎石の上に設置し、その上に柱を立てた。この柱を水平の梁でつなぐことで、城の重量を均等に分散させるための骨組みができあがった。この構造は、周囲の石垣の建設が進むにつれて、土で埋め戻された。

外部サポート機能

石垣を築く前に、石垣の下地となる部分に 3m の丸太を約 50cm 間隔で並べた筏のような構造物で補強を行った。その上にさらに丸太を壁のラインと平行に並べ、土台の大きな石を支える「枕木」を作った。さらに、基礎から 5 メートルほど離れた堀の下には、丸太を 2 列、垂直に打ち込んだ。これは土が滑らないようにするための固定材だと考えられている。